

貧しさの中で

豊かな教育の工夫

— ユーゴスラビア —

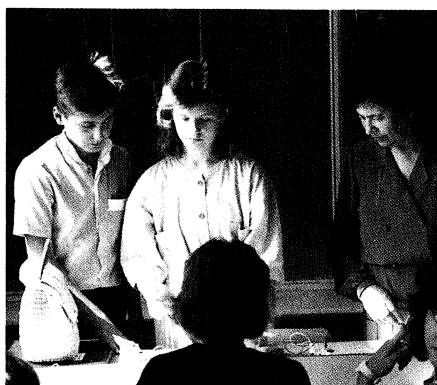
今回の訪問地レスコバツ市は、首都ベオグラードの南東二百八十キロメートルの所にある、そこで四日間にわたり、小学校六校と音楽学校一校、「レスコバツ・コミュニケーション教育研究所（日本の教育委員会）」を訪問した。以下、その教育活動を紹介したい。

経済的な貧しさの中での教育活動

「我が国は経済的に貧しくて」という教育研究所長の説明のとおり、どの学校も石造りの古い校舎で、教室は狭く、教材教具も貧弱であった。写真①は物理の授業風景であるが、教室環境は簡素であり日本の小学校とは大きく違っていた。ただ、ユーゴの英雄チトー



写真① 先生の質問にハンドサインをおくる生徒たち（シニシャ・ヤーニッチ小学校）



写真② 代表生徒による電流回路の実験（シニシャ・ヤーニッチ小学校）

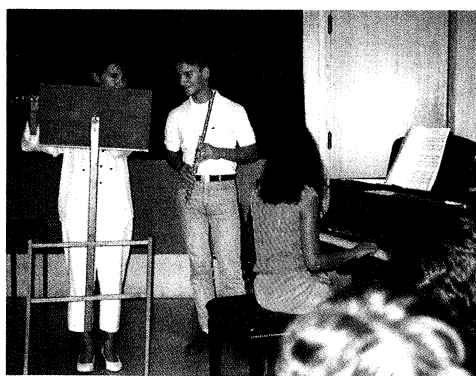
大統領の肖像写真が、どの教室にも正面にしっかりと飾られていたのが印象的であった。参観授業は、すべて一斉指導の形態で行われていた。写真②は①と同一授業の記録であるが、教卓に一組の実験器具があるだけである。代表生徒の実験で学習が進められていた。さらに、経済的な貧しさは「二部制」の授業によくその事情があらわれていた。「二部制」とは、午前と午後に生徒を分けて登校させる制度である。半日で十分な教育効果を上げなければならない苦しさを感じてきた。

発表力を重視した教育活動

訪問したどの学校も、「積極的に話す（発表する）」ことに指導の重点を置いていた。教師の発問に対する子どもたちの反応は積極的にわれさきに挙手（写真①）して発表しようとしていた。「なぜ話すことに力を入れているのか」と質問したら、「日本では『沈黙は金なり』というが、この国では『沈黙はバカなり』との返事に一同爆笑であった。

「自主管理」による生徒指導

生徒指導はどう進められているか、今回の訪問でもこのことは視察団の大きな関心事項であった。前記の「二部制」でも、「半日子どもが自由に生活することについての学校としての対策は？」に対し、「何もない。すべて家庭と本人の自主管理にまかしている。一部生徒は課外活動（写真③）などに参加している」とのことであった。また、子どもたちの自由な服装（化粧、イヤリング、マニキュア等）についても「親の責任の範囲であり規制はない」とのことであった。そして、逆に「日本では、いじめ、しつけ、自殺が大きな問題となっていると聞くが、豊かな国ほどそういう問題が多いのではないか」と指摘され経済的な豊かさが必ずしも教育の豊かさにはつながらないことを痛感させられた。



写真③ アンサンブルの演奏を楽しむ生徒たち（スタニフラフ・ピニチキ初等音楽学校）

昭和六十二年度文部省教員海外派遣第十四団

二本松第一中学校 教諭 小澤 悌一